

21 神楽・荒神・藁蛇—中国地方の荒神祭祀の世界—

【全2回】／開催方法：ハイブリッド

なかのあいか
中野秋鹿

中村元記念館東洋思想
文化研究所研究員



受講料 一般料金：¥4,200 早割価格：¥3,200(納入期限：8月27日)

【日程・時間】【全2回】 9月1日(日) 13:20~14:50・15:00~16:30

■受講に必要なもの

[テキスト] レジューメ配布

全国的に見ても極めて多様性が高い中国地方の神楽。その中でも特に際立った特徴を示すのが、7年や13年などの式年で行われる荒神神楽です。

丁寧まづに祀れば福をもたらし、祀りを怠れば禍わざわいをもたらす。「荒神」と呼ばれる荒ぶる神への信仰は、平安後期頃に天台系の宗教者の間で発生したと考えられており、中世・近世を通じて、庶民の信仰世界に広く深く浸透していきました。

全国的には竈かまどの神として知られる荒神ですが、こと中国地方においては、竈神にとどまらない特異な信仰形態が数多く見られます。血縁・地縁的共同体の祖先神や牛馬の守護神など、人々の生活に関わる様々な神格が「荒神」の名のもとに包括され、各地域で祀られ続けてきたのです。

荒神が祀られた場所は多くの場合、氏神社のような立派な社殿ではなく、木や石などの自然物、小さな祠ほこらや塚です。そしてその木や祠にはしばしば、稲藁で作られた長い蛇たつ(竈)が巻き付いています。蛇は古来より水神などの正のイメージと、妄執もうしゅうなどの負のイメージをあわせ持つ存在であり、中国地方の荒神祭祀においては非常に重要な役割を担っているのです。

式年の荒神神楽は、担い手である地域の人々が何か月も前から準備を進め、祭り当日に荒神を祀る場所から特設の神殿(こうどの・かんどん)へ、神々を迎えるところから始まります。それから神殿の上で長い長い時間をかけて、様々な儀式と舞が繰り広げられ、やがて藁蛇を用いた神懸かみかかりの儀式に至り、祭りの興奮は最高潮を迎えます。

少子高齢化による担い手の減少や感染症の流行など、荒神神楽を取り巻く状況は厳しさを増していますが、今も中国地方の各地で、伝承を絶やすことなく舞い継いでいる人々がいます。

本講座では、荒ぶる神々と、藁蛇と、地域の人々の祈りとが重なり合って展開する、荒神祭祀の神秘的な世界をご案内します。